

アラン・チャドウィックの菜園プロジェクトと カリフォルニアのオーガニック運動への影響

西村 仁志

(受付 2019年10月30日)

1. はじめに

本稿では1960年代から70年代にかけてアメリカで活躍したイギリス人の園芸教育家アラン・チャドウィック¹⁾ (Alan Chadwick, 1909–1980) と彼が関わった菜園プロジェクトを取り上げる。彼は日本では知られていないが、1962年にアメリカに到着し、以後70歳で亡くなる1980年までの約18年の間、菜園づくりと若者たちの指導に残りの生涯を捧げ、今日のカリフォルニア、ひいてはアメリカ全体におけるオーガニック運動の初期の段階で関係者に大き



写真1 UC Santa Cruz 学生菜園にて作業をおこなうアラン・チャドウィック (Courtesy Special Collections, UC Santa Cruz)

1) 本稿では人名を Alan Chadwick はチャドウィック、また日本でもよく知られている思想家の Rudolf Steiner についてはルドルフ・シュタイナーとカタカナで表記し、それ以外の人物はオリジナルな欧文での表記とした。また地名についても州名などを除きオリジナルな欧文での表記とした。

な影響を与えた。

チャドウィックはイギリス貴族の裕福な家庭の出身で、少年時代から思想家・教育者のルドルフ・シュタイナーの影響を強く受け、園芸だけではなく文学、演劇といった幅広い領域の修養を身につけた。こうした背景をもった彼の菜園での指導手法は独特であり、プロジェクトに集まった若者たちは「Apprentice（以下、実習生と記述）」と呼ばれ、菜園での作業を通じた園芸技術の修得だけではなく彼の自然観やライフスタイルに大きな影響を受けることとなる。実習生のほか彼に出会い強い影響を受けた人たちは後に農園経営者、教育者、研究者、ワイン醸造家やレストラン経営者となり、彼らはCSA（Community Supported Agriculture：収穫物の契約直販制度）やファーマーズ・マーケット、コミュニティ・ガーデンの立ち上げ、オーガニック認証制度の確立、オーガニック、ベジタリアン、ビーガンなどのレストラン経営や料理法の確立など、現在米国における「オーガニック運動」をリードする存在となっているとともに、関係者は菜園教育活動を学校のみならずホームレスの社会復帰支援にも用いるなど、社会的公正の実現に向けた営みにも続いている。

またチャドウィックが初めて学生・実習生への指導に携わったカリフォルニア大学サンタクルーズ校（以下、UC Santa Cruz）では、彼が拓いた菜園を発展させるかたちで30エーカー（約121,400 m²）もの広大な農場を開設し、現在では「Center for Agroecology & Sustainable Food Systems（アグロエコロジーと持続可能な食料システムのためのセンター）」として世界的にも重要かつ先進的な研究拠点となっている。なかでもチャドウィックの在任中から始まり、その後50年以上にもわたって継続されてきた実習生制度「Apprenticeship Program」からは1,500名もの修了者を有機農業やオーガニック運動の担い手として全米だけではなく世界中に送り出し続けている。このように米国においてオーガニック運動が生まれ、広く人々のライフスタイルにまで浸透していく上で彼が与えた影響はきわめて大きい。そこで本研究では、彼の来歴について記したうえで、菜園で用いた作業技法と指導手法の背景や特徴について、また関係者のその後の動きへの影響について明らかにするものである。

2. 研究の方法と文献、史料、先行研究について

本研究では文献、史料としてチャドウィックに直接関係するもの、そしてオーガニック運動に関係するものを収集し、また関係者へのインタビューを行った。

チャドウィックは存命中に著書を執筆することはなかったが、没後、彼がカリフォルニアならびにヴァージニアの各地で行った数々の講演の録音から、編集者のStephen J. Crimiによって纏められた2冊の講演集『Performance in the Garden（ガーデンでの演技）』（2007）と『Reverence, Obedience and the Invisible in the Garden（尊敬、従順、そしてガーデンに

において目に見えないもの』(2013)が出版されている。評伝としては UC Santa Cruz の学生菜園プロジェクトでチャドウィックから学んだ元実習生の Robert Howard が書いた『What makes the Crops Rejoice: An Introduction to Gardening (何が作物を喜ばせるのか：園芸入門)』(1986)では、チャドウィックのイギリスの家族へのインタビューをもとにした彼の来米以前の経歴を詳細に記述してある。また元 UC Santa Cruz 教員でチャドウィックを招聘し、UC Santa Cruz を去った後も、亡くなるまで交流のあった Paul A. Lee が著した『There is a Garden in the Mind: Alan Chadwick and the Origins of the Organic Movement in California (心のなかにガーデンがある：アラン・チャドウィックとカリフォルニアのオーガニック運動の起源)』(2013)は UC Santa Cruz への着任の経緯から、学生菜園プロジェクトの経過、大学からの解雇とその後について、筆者自身の経験や活動をふまえて記されている。

インタビュー資料として、彼の菜園プロジェクトの実習生として直接指導を受けた Jim Nelson 氏、Nancy Lingemann 氏、また Green Gulch 農園にて指導を受けた Wendy Johnson 氏、小田まゆみ氏には直接ヒアリングを行った。また先述の Paul A. Lee 氏とはメールの交換を通じて筆者の質問への回答とアドバイスをいただいた。さらに UC Santa Cruz の2つの口述歴史プロジェクト「The Early History of UCSC's Farm and Garden (UC Santa Cruz ファームの初期の歴史)」ならびに「Cultivating a Movement: An Oral History Series on Sustainable Agriculture and Organic Farming on California's Central Coast (運動を耕す：カリフォルニアの中央沿岸部における持続可能な農業と有機農業についての口述歴史シリーズ)」には、チャドウィックに関係した多くの人々のインタビュー記録が纏められており、重要な史料となった。また同様に UC Santa Cruz の McHenry 図書館の特別コレクションにはチャドウィックのレクチャーの録音、俳優時代のポートレート写真、自作の詩、実習生の作業記録日誌、ミーティング記録等が収蔵されている。

またチャドウィックに関するインターネット上には3つのライブラリーが作成、公開されている。UC Santa Cruz 学生菜園プロジェクトの実習生であり、後に Saratoga でのコミュニティガーデニングプロジェクトのディレクターとなった Greg Heynes による「Alan Chadwick a gardener of souls」²⁾、ヴァージニアでの菜園プロジェクトの実習生であった Craig Siska と編集者の Steve Crimi による「Alan Chadwick Living Library & Archive」³⁾、Covelo での菜園プロジェクトの実習生であった Fred Marshall と Katrina Frey によって作成された「The Alan Chadwick Legacy Project」⁴⁾である。これらにはそれぞれ彼の伝記、本人や実習生たちの映

2) “Alan Chadwick a gardener of souls” <http://www.alan-chadwick.org/>

3) “Alan Chadwick Living Library & Archive” <https://chadwickarchive.org/>

4) “The Alan Chadwick Legacy Project” <http://www.talkingchadwick.org/>

像、動画や文章などが収集され掲載されている。

またルドルフ・シュタイナーの思想体系である「Anthroposophy（人智学）」と今日の環境主義との関連について宗教史・思想史学者の Dan McKanan が論じた「ECO-ALCHEMY Anthroposophy and the History and Future of Environmentalism（エコ錬金術：人智学と環境主義の歴史と未来）」があり、チャドウィックの米国における活動への言及があるので、参考とした。

なお本稿における「オーガニック運動」とはなにか。これを詳しく紐解くのは別の論考が必要となるが、筆者はひとまずこれを「産業社会化、都市化の進展および平和、環境、人権、フェミニズム運動などを背景に、化学農薬、肥料等の物質を使わず生命活動を利用した農産物を作ることを基盤とし、またそれらの加工、流通、消費などの経済活動、持続可能なライフスタイルや社会の形成にまで及ぶ一連の動き」だと定義しておく。

また本稿ではチャドウィックが作り運営した「Garden」の日本語訳として「菜園」を用いる。「Garden」には日本語訳として「庭」や「庭園」という意味があり、これには造園家の芸術作品としての意味が含まれている。一方、「Garden」には「Kitchen Garden」という言葉があるように、食料を産する菜園や果樹園などの意味も併せ持っている。チャドウィックの「Garden」は野菜、果樹、ハーブ、花卉などを混植しており、食料を生み出す場であるとともに芸術作品であるともいえる。このように「Garden」は広い意味をもつ言葉であり、日本語にそのままあてはまる言葉を見つけることはできないが、今回は「菜園」と表記することとする。

3. チャドウィックの前半生

アラン・チャドウィックは1909年7月27日イギリスに生まれた。チャドウィック家は貴族階級の裕福な家庭で、チャドウィックはコック、メイド、園丁など多くの使用人がいる広大な敷地の邸宅で育った。母親の Elizabeth はオーストリアやドイツで活動した思想家・教育者のルドルフ・シュタイナーが提唱する「人智学運動（Anthroposophy Movement）」に傾倒しており、その方針に沿って子どもたちを育てた⁵⁾。シュタイナーは20世紀初頭に教育、芸術、建築、医療、農業にまで至る幅広い思想と実践を行っており、チャドウィックも少年時代にロンドンでのシュタイナーの講義を聴き大きな影響を受け、さらにスイスのヴァルドルフ学校（シュタイナー教育の学校）で学んだ。彼は、後に実習生たちに「私はシュタイナーの生徒ではない。シュタイナーの子どもだ」と語っている。

5) アラン・チャドウィックは兄の Sedon との二人兄弟である。

チャドウィックは大学への進学はしていない。16歳から園芸のプロを目指してイギリスおよびフランスの複数の農園で実習生として学び、野菜と果樹、花卉の栽培法を学んだのである。また1930年、21歳のときには進路変更をし、演劇への道を志してロンドンにある Elsie Fogerty の演劇学校 Central School of Speech and Drama⁶⁾ に入学する。演劇人としてのキャリアのスタートである。以後1930年代は俳優として英国やアイルランドでシェークスピアの演目のほか「レベッカ」、「ペトリファイド・フォレスト」、「エイブラハム・リンカーン」などの現代劇公演にも出演した⁷⁾。俳優としての有り様は彼のアメリカでの後半生においても大きな意味をもち、UC Santa Cruz をはじめとする菜園プロジェクトにおいても、しばしば彼は実習生や講演の来聴者を前にシェークスピア演劇の多くの台詞や演技を用いている（後述）。

1939年に始まる第二次世界大戦はチャドウィックの生活や活動を一変させる。1940年、ロンドンでの公演に出演中にも、周辺にドイツ軍の空爆が襲うようになってきたのである。戦況も悪化するなか、チャドウィックは海軍に志願入隊し、掃海艇の艇長となる。インドにて任務に従事中に負傷したことから、生涯背中への痛みを悩まされることとなった。

戦後、1950年に南アフリカ連邦（当時）での新たな演劇運動の立ち上げに参加するが、1952年には Cape Town 近くの Simons Town にイギリス海軍の提督公邸の庭師としての職を得て再び園芸の道に戻る。1957年には Wynberg Hill の公邸にチャドウィックが一から作った最初の庭が出来ている。

南アフリカでは後に彼の UC Santa Cruz への着任を決定づける Freya von Moltke との出会いがあった。Freya の夫の Helmuth James Graf von Moltke はドイツの法律家、弁護士で、「クライザウ・サークル」と呼ばれる反ナチス運動のリーダーとしてゲシュタポに反逆罪で逮捕され、1945年に絞首刑になった人物である。Freya は戦後の混乱を逃れ、親族を頼って南アフリカに滞在していた。

チャドウィックはその後、カリブ海の島国バハマでの個人宅の菜園づくりに従事し、そして1962年にアメリカに渡り、ロングアイランド州での菜園づくりに従事した。

4. チャドウィックの菜園プロジェクト

4.1 UC Santa Cruz の学生菜園プロジェクト

UC Santa Cruz は1965年、Santa Cruz 市内とモンレー湾を見下ろす絶景の丘の上のキャ

6) 1906年に創立し、著名な演劇人を多数輩出している。2005年にはロンドン大学のカレッジのひとつとなっている。

7) Howard, 1986, p. 104

ンパスにカリフォルニア大学システムの9番目の大学として開校した。ここではイギリスの総合大学のように学部学科とは別にリベラルアーツ教育と学生寮を一体化した「カレッジ」を複数配置するユニークなシステムを作ろうとしていた。歴史学の教員 Page Smith や哲学の教員の Paul Lee は設立間もないこの大学において学生たちに「A Sence of Place : 場所の感覚」を身につけてほしいと願っており、初代学長の Dean McHenry の同意を得て、学生菜園プロジェクトをスタートすることになった。Paul は UC Santa Cruz の歴史学・社会思想の客員教授 Eugen Rosenstock-Huessy⁸⁾ に同行していた前述の Freya von Moltke から、このプロジェクトの指導者として最も適任だとしてチャドウィックを紹介されたのであった。Freya の息子二人が南アフリカでチャドウィックの菜園での体験から学んでいたことや、チャドウィックともどもそれぞれ大戦の時代を体験して、平和への共通した思いを持っていたことによる。

こうして1967年3月1日、チャドウィックは UC Santa Cruz に到着し、Cowell College の上部の南向き斜面を菜園の適地として、翌日から一人で地面を掘り始めた⁹⁾。彼は夜明けから日没まで、休むことなく働いたという。当初、事情をよく知らない大学関係者から奇異の目でみられるが、しだいに学生たちもプロジェクトに集まり、チャドウィックは畝立て、種まき、移植、散水など農作業のやり方と意味を教え始める¹⁰⁾。後述する「二重掘り (Dubble Digging)」によって深く耕され、堆肥によって栄養を得たこの土地は花、野菜、果樹が植えられようになる。

スタートから2年後、1969年の夏にはこの学生菜園は約4エーカー(約16,000 m²)にまで拡張し、一面の藪だったキャンパスの斜面地は見事に花々と野菜や果物などの収穫物を生み出すことが出来る豊かな土壤に生まれ変わった。これは農薬や化学肥料を用いず、また人力だけで成し遂げられたものだ。花々はプロジェクトに参加した学生たちによって McHenry 学長宅や大学内のオフィスに届けられ、また菜園近くの路上にはスタンドを置き、収穫物を無料で配布した。菜園内ではチャドウィックと実習生たちが収穫物を用いて料理をし、食卓には花を飾って食事の愉しみを共有した。

学生菜園プロジェクトをサポートし続けていた Paul Lee は Cowell College の大学食堂の厨房にここでの収穫物を使ってもらおうべく働きかけたが、大学が契約した外部業者であることと、試用中にレタスにカタツムリが居たということからこの話は流れることとなる。この経験から Lee は独自に仲間たちと事業体をつくり、1970年に学内に「Whole Earth Restau-

8) Eugen Rosenstock-Huessy はドイツからのユダヤ人亡命者であり、ハーバード大学とゲートマス大学で教鞭を執った後、客員教授として UC Santa Cruz に着任していた。

9) Howard, 1986, p. 110

10) Lee, 2013, p. 32

rant」という学生食堂を開業した¹¹⁾。ここでは学生菜園で収穫された有機野菜を用いたスープ、サラダ、サンドイッチのほか肉、魚料理やデザートも提供する本格的なもので、現在のオーガニックレストラン¹²⁾の原型ともいえる。

こうしてチャドウィックと学生たちとの菜園プロジェクトはその美しさと質の高い収穫物により大学の内外で評判となる。しかし一方で学内の一部の科学者からは当時の農薬や化学肥料を用いる慣行農法ではない、チャドウィックの有機農法、とりわけバイオ・ダイナミックへの懐疑的な意見が示されるようになった。こうした「反対勢力」によって大学執行部に対してチャドウィックの免職を求める圧力がかったこと、そして別の要因として、一部の実習生との確執があったことも複数の資料により示唆されている。こうして1972年、チャドウィックは大学から解雇を言い渡され、UC Santa Cruz を去ることとなる。

4.2 UC Santa Cruz 以後の菜園プロジェクト

チャドウィックはこの後、Paul Lee の紹介で出会ったサンフランシスコ禅センターのRichard Baker 師から招聘をうける。センターが同年サンフランシスコの近郊、Marin 郡のMuir Beach 近くに禅道場と農園を併せ持った「Green Gulch」を拓くにあたり、チャドウィックは庭師として着任したのである。

サンフランシスコ禅センターはサンフランシスコ市内の日本人街にある曹洞宗桑港寺の住職であった鈴木俊隆師が、主に日本人／日系人以外の禅修行者のため、桑港寺とは別に1962年に開設したもので、サンフランシスコ市内の修行道場のほか、ここから260キロ南下したCarmel Valley の山中に「Tassajara Zen Mountain Center」を開設していた。鈴木は前年の1971年に死去し、高弟であった Baker 師が後継者となっていたのである。

チャドウィックは Green Gulch で、UC Santa Cruz から同行した2名の実習生、そして禅修行者たちを指導して最初の菜園を拓き、ここでも良質な野菜や花を生み出すが、菜園についての考え方や座禅を優先する修行者のルーティンについて不満を持ち、1年で退職している。

またこの時期には並行して Saratoga 市の幼稚園教師 Betty Peck と地元紙ジャーナリストの Jackie Welch の招きにより「Saratoga Community Garden Project」を指導している。彼女らの娘が UC Santa Cruz の学生菜園プロジェクトの実習生であり、彼女ら自身もチャドウィックの公開講義に参加していたことをきっかけにスタートしたものだ。このプロジェク

11) Collective Museum “Whole Earth Restaurant, Quarry Plaza Contributed by Linda Wilshusen” <https://iascollectivemuseum.com/linda/> (2019年7月26日確認)

12) Organic and Farm to Table Restaurant：近隣の農園で採れた有機農産物を使うことにこだわったレストラン

トは1972年から1987年まで地域住民によって運営され、近隣の多くの子どもたちの体験学習の場として活用されている¹³⁾。

翌年1973年にはカリフォルニア州北部の Covelo, Round Valley の農園主 Richard Willson から招きを受け「Covelo Garden Project」をスタートさせる。このプロジェクトは約6年間と最も長く継続し、ここでも多くの実習生を育てている。またここには当時のカリフォルニア州知事で、後に合衆国大統領となった Ronald Reagan が1974年に視察訪問し、チャドウィックと面会している。なお、この頃から彼は前立腺がんを煩い、戦争で負った古傷もあり、冬や真夏の作業は苦しくなってきたそうである。

チャドウィックの最後の菜園プロジェクトは1978年からのヴァージニア州 New Market である。シュタイナーの思想体系を実践しようとするコミュニオンからの招聘であった。チャドウィックはここでも実習生たちを指導するとともに、1979年、公共放送局 PBS-TV にて特集番組「Garden Song」が収録されインタビューに応じている（放映は翌1980年¹⁴⁾）。同年にはがんの病状が進行したため、サンフランシスコ禅センターの Richard Baker 師に再び招かれ、終末期を過ごすために12月に Green Gulch に戻る。チャドウィックはここで最後の5ヶ月間を過ごし、病床に集まった元実習生たちや関係者に対するレクチャーを何度も行ったあと、1980年5月25日に逝去した¹⁵⁾。

4.3 バイオ・ダイナミックとフレンチ・インテンシブ農法

チャドウィックが農法として用いたものは2つのルーツがある。まず彼が少年時代から薫陶をうけたシュタイナーによって提唱された有機農法・自然農法の一つである「バイオ・ダイナミック農法」である。シュタイナーは化学肥料や農薬を用いないというだけでなく、農園全体を一つの生命体としてとらえ、土壌と植物、昆虫や家禽などの動物との相互作用に加え、太陽や月、惑星、星座など宇宙の運行が生育に作用するとし、月の運行に基づく農業暦を用いる。日本におけるシュタイナーの研究者である小杉英了は「外界に存在する生きた自然と、自分の内部に形象として現れる自然との間に、相乗的に高まりながら交流する生命力を感じた」（小杉、2000、p. 46）と述べているが、チャドウィックの自然観もこうした考えに基づいているといえる。

もうひとつはチャドウィックがフランスとイギリスで学んだ「フレンチ・インテンシブ農法 (French Intensive Gardening)」というもので、17世紀にルイ14世（太陽王）が造営した

13) 「Saratoga Community Garden」<https://chadwickarchive.org/garden-projects/saratoga/>

14) 「Alan Chadwick: Garden Song (1980)」<https://www.youtube.com/watch?v=vRVQc3ht9oU&t=448s> (2019年7月4日確認)

15) チャドウィックの葬儀は Richard Baker 師とカトリック神父の二人により両方の様式に則って執り行われ、墓石は Green Gulch Farm を見下ろす丘の上に置かれている。

ベルサイユ宮殿の菜園を担当した庭師 Jean de la Quintinie の流れをくむ栽培手法である。この農法は、育苗に木箱を用い、密に種まきを行うことで「微気候 (Micro Climate)」を作り出す。これによって雑草の発生や水の使用量を抑えることができるというものだ。また畑はスペード (シャベル) とフォークを用いて「二重掘り (Dubble Digging)」を行い、土壌を深くまで攪拌して堆肥を入れるのが特徴である。

Santa Cruz が位置するカリフォルニア中央沿岸部は地中海性気候で、雨は冬に集中して降り、春から秋にかけては晴天が続き乾燥した気候であり害虫がつきにくい。低地には雪は降らず四季を通じて農作業が可能であり、チャドウィックのもたらしたこれらの手法はここに最適なものであったと言える¹⁶⁾。

前者のバイオ・ダイナミック農法について、Paul Lee によれば「当時、大学においてオーガニック農法を紹介することはたいへん困難だった (とくにシュタイナーのバイオ・ダイナミック農法は不可能に近い)。チャドウィックは一種の盾か幕としてフレンチ・インテンシブ農法を用い、バイオ・ダイナミックの謎を冒涇から守るかのようにシュタイナーについては概ね口を閉ざした。」¹⁷⁾としており、また複数の実習生たちによればバイオ・ダイナミック農法では精神面や神秘面を強調、重視し、加えて散布調合剤として牛の角や水晶の粉末などを用いるが、チャドウィックはこうした調合剤は用いることはなく、バイオ・ダイナミック農法についてチャドウィック自身は理解した上で、プロジェクトの中ではすべてを細部にわたって忠実に実施したわけではないようである。

後に「How to Grow More Vegetables」の著者となる John Jevons と彼のグループ「Ecology Action」はチャドウィックの用いた農法について、テスト圃場での散水量や収穫物の定量的な計測に基づく検証を行った結果、少ない水と自家製の肥料を用いて、2倍以上の収量と3倍以上のカロリーを生み出すことが出来るということを実証し、「バイオ・インテンシブ農法」と名付けて普及にあたっている¹⁸⁾。

Howard はチャドウィックがアメリカのオーガニック農法に与えた3つの貢献を挙げている¹⁹⁾。一つは盛り土を枠で囲う「レイズドベッド (Raised Bed)」の手法をもたらしたこと。2つめに、機械に頼らない人力による手作業にこだわり続けたこと。3つめに野菜だけではなく花卉、果樹、ハーブなど複数の植物を混植する手法を用いたことである。これらはいずれも小規模な菜園に適したものであり、すなわち狭い土地であっても効率よく少量多品種を栽培し、質の高い収穫物が得られるものだ。

16) 一方で Covelo は内陸部にあり夏季の高温や冬季には霜が降りるなど苦労したようだ。

17) Lee, 2013, p. 38 筆者訳

18) Jevons, 2017, p. 3

19) Howard, p. 115

また、Green Gulch でチャドウィックの最期を看取った Wendy Johnson によると、チャドウィックは植物の伝統種を守ることにたいへん重要視しており、病床からも具体的な指示をしていたこと、そして元実習生たちはチャドウィックの没後、いわゆる「ギルド（同業者組合）」を形成して種子の保存や交換を行っていたと述べている²⁰⁾。

4.4 チャドウィックによる実習生指導の特徴

チャドウィックのもとに集まった学生たちは Apprentice（見習い、実習生）と呼ばれ、またこの仕組みは後に Apprenticeship（徒弟制度）と呼ばれるようになる。チャドウィックは学生の前でやってみせて、意味を語る。そして同じようにさせる。まさに「為すことによって学ぶ“Learning by Doing”」であった。また演劇人であったことから、演技、語り、大声、大きな音をたてる、ユーモア、風刺、比喩を用いたドラマチックな技法を用いたり、「問答を通じ、深い理解を促す」といったことも特徴として挙げられる。一方で、怒りっぽく気分屋な性格であったことも指摘されており、人間関係上のトラブルも度々あったようである。

元実習生の Jim Nelson は「彼には学歴や資格などはありませんでした。彼は自分自身を教師とは考えなかったが、最も深い意味では芸術家であり教師であった。彼は方向を指摘し、そして私たちが自然界において自身の場所を見つけることは自分たち次第でした。」また、それまで英文学を学んでいた Nelson は「ヨーロッパの伝統文化や文学の世界が、人間の姿になって自分の目の前に現れた」²¹⁾と述べている。

Howard は「チャドウィックの教え方は、実用性とビジョンを組み合わせた単純で古典的な方法でした。最初に何かをする方法を示し、次に同じことをするように学生を働かせました」と記している。

元実習生の Beth Benjamin は「アランは私にとってキャンパスで最も魅力的な人間でした。彼の菜園以外はもうなにも視界に入ってきませんでした。私は大学の授業ではまったく楽しくないのに、菜園では色や香り、アランが語る植物や彼の旅の話、そして私が学ぶ新しいスキルにわくわくしたのです。4月までには私は休学し、私の全ての時間を植物の世界に捧げる旨を大学のカウンセラーに申し入れました。実習生として夜明けから日没まで働き、彼の夢とそれを現実のものとするための仕事、新しい地面を拓き、また既に植えたものの世話をすること。これらに私は満たされました。彼は燃えるようなかんしゃく持ちで、物語を語り、実習生たちのために夕食会を開き、彼自身のパン、ハム、チーズを食べさせてくれました。土の塊を私たちに投げつけて、自分はコンポストの影に隠れることも。彼は私たちに働くことの喜び、夢をかなえるために最後までやり遂げるという修養を教えてくださいました。暑くて

20) Johnson へのインタビュー（2019.7.12）による。

21) Nelson へのインタビュー（2019.5.29）による。

疲れているときでさえ、途方もない肉体労働の後の休息のひとつとティータイムの喜びを。私は30年経った今もなお、笑顔の記憶と彼が私に与えてくれた全てへの感謝を思っています。』²²⁾

このようにチャドウィックは若者たちにとって「グル」的な存在となっていた。学生たちのなかには Benjamin のように休学や退学をして菜園プロジェクトに没頭するものもあり、その後の進路や人生にも大きな影響を及ぼすことになる。

5. 実習生たち、関係者のその後とカリフォルニアのオーガニック運動の拡大

5.1 UC Santa Cruz 実習生と関係者

最初の実習生であった Jim Nelson, Beth Benjamin 夫妻はチャドウィックの推薦で Santa Cruz の近郊の街 Boulder Creek にある「Camp Joy Gardens」に着任する。彼らはここをオーガニック野菜の栽培と CSA, そして子どもたちから大人までの教育農場として運営・発展させてきた。このファームも実習生制度をもっており、さらに人材を生み出してきた。

同じく最初の実習生であった Michel Stusser は同じく「Camp Joy Gardens」で働いた後、Sonoma County の環境 NPO「Farallones Institute Rural Center」の造園に関わった。ここでは自然エネルギー利用やパッシブソーラーハウスなどのサステナブル技術の実験プロジェクトが行われ、また発展途上国に派遣される「Peace Corp (平和部隊)」の実習機関でもあったため、ここで養成された人材は海外で活躍することとなる。Michel はその後日本に渡り、禅の修行とともに日本庭園と酵素風呂の技術を学び、同じ Sonoma County にて「Osmosis Day Spa Sanctuary」を設立し経営にあたっている。

Nancy Lingemann は Santa Cruz 郊外で2名の友人とともにウエディング専用の生花のビジネス「Frower Ladies」を始め、現在も第一線で経営を行っている。

Steve Kaffka はチャドウィックが退職後の UC Santa Cruz 菜園プロジェクトを率い、またキャンパス下部の敷地内に UC Santa Cruz ファームとして大きく拡大してからの実習生プログラムの運営にあたった。その後コーネル大学で農学の博士学位をとり、現在はカリフォルニア大学デイビス校にて、バイオ燃料のスペシャリストとして研究にあたっている。

Orin Martin はチャドウィックが UC Santa Cruz 退職後、Steve Kaffka のもとで実習生プログラムの運営にあたった。チャドウィックが実習生たちとともに拓いた最初の菜園は「Alan Chadwick Garden」と名付けられており、彼は現在(2019年シーズン)も UC Santa Cruz CASFS のスタッフとして、この菜園での実習生プログラムの指導を行っている。

22) Lee, 2013, p. 56

Sharon Cadwallader は UC Santa Cruz の「Whole Earth Restaurant」でシェフを務め、ここのレシピを纏めた料理本「Whole Earth Cook Book」を出版した。

Paul Lee と Page Smith は大学での教鞭のかたわら、有志の仲間たちとともにホームレスの就労支援・社会復帰のためのプロジェクト「Homeless Garden Project」²³⁾を1990年 Santa Cruz 市内でスタートし、この団体は現在も活動を継続している。

なお、チャドウィックの直接の実習生ではないが、Wendy Krupnick は1976-77年に UC Santa Cruz 農場の実習生となり、その後、前述の Michel Stusser が関わった Farallones Institute、そして Jim Nelson、Beth Benjamin 夫妻の Camp Joy で働いた後、オーガニック農場の認証組織 California Certified Organic Farmers (CCOF) の専従事務局長となり、オーガニック認証制度の確立に大きな役割を果たしている²⁴⁾。

5.2 「Ecology Action」関係者

前述した John Jevons とそのグループ「Ecology Action」²⁵⁾は1971年に Palo Alto 市で行われた Steve Kaffka (前述)による研修会から、バイオ・ダイナミック農法とフレンチ・インテンシブ農法について学んだ。彼はスタンフォード大学のシステムアナリストであったため、Palo Alto 市の工業団地内に確保した菜園を用いて散水量や収穫物の定量的な計測を行った。その結果、少ない水と自家製の肥料を用いて、2倍以上の収量と3倍以上のカロリーを生み出すことが出来るという、これらの農法の優秀性を検証したのである²⁶⁾。この菜園にはチャドウィックも視察に訪れている。

John Jevons はチャドウィックの手法を図書、研修会などで伝達可能なように形式知化を行い、1974年にはじめて「How to GROW MORE VEGETABLES」という書籍にまとめ出版した。現在も改版を重ねて第9版が発売され、またスペイン語、ドイツ語、フランス語にも翻訳出版されている。「Ecology Action」は当初 Palo Alto 市の工業団地内で菜園プロジェクトを行っていたが、1982年からは北カリフォルニアの Mendocino 郡 Willits 市に移転し、現在もここで研究開発とインターンシップの受け入れ、講習会での普及活動などを行うとともに、中米、南米やアフリカへの農業支援を積極的に行っている。

23) 「Homeless Garden Project」<http://www.homelessgardenproject.org/> (2019年7月26日確認)

24) California Certified Organic Farmers (CCOF) は1973年に Santa Cruz で設立されたアメリカにおける最初のオーガニック農場の認証機関であり、業界団体でもある。<https://www.ccof.org/> (2019年7月26日確認) また Krupnick へのインタビュー記録が UCSC のアーカイブに収録されている。「Wendy Krupnick: Pioneering UCSC Farm and Garden Apprentice, Educator, Horticulturalist」<https://scholarship.org/uc/item/7818q87k> (2019年7月26日確認)

25) 「Ecology Action」<http://www.growbiointensive.org/> (2019年7月26日確認)

26) Jevons, 2017, p. 3

5.3 Covelo での実習生

Covelo で実習生であった Stephen Decater はチャドウィックのもとで学んだあと、1977年、妻の Gloria とともに Covelo にて「Live Power Community Farm」を設立し、現在も運営している。この農園はバイオ・ダイナミック農法、そして農業機械を使わず人力と馬の力を使うことにこだわり、実習生プログラムも行っている。またカリフォルニアで初期に CSA の取り組みを始めた農園のひとつとしても知られている²⁷⁾。

同じく Alan York は Covelo でのプロジェクトに3年にわたって滞在し、実習生のリーダー的存在であった。その後はバイオ・ダイナミック農法のスペシャリストとして各地で指導にあたっている。オーガニック農園を舞台にした2018年公開のドキュメンタリー映画「The Biggest Little Farm」ではアドバイザーとして、一度荒廃した土壌を家畜や堆肥など生命の力を利用して見事に復活させている²⁸⁾。

Johnsan Frey と Katrina Frey 夫妻は家業の農園が1980年にワイナリー「Frey Vineyards」をはじめるとあって、アメリカで最初の「オーガニックワイナリー」となった。このワイナリーは80年代後半には合成亜硫酸塩防腐剤を使わない手法、また1996年にはブドウ栽培をバイオ・ダイナミック農法に転換し、本農法の認証組織である Demeter International から北米で最初の「バイオ・ダイナミックワイン」の認証を受けている²⁹⁾。

Dennis Tamura は Covelo で実習した後、UC Santa Cruz の実習生プログラムの指導者となる。その後独立して Watsonville にてオーガニック農園「Blue Heron Farm」³⁰⁾を設立、経営している。このファームは近郊のファーマーズ・マーケットに出店しており、良質のオーガニック野菜、果物と花々を販売している。

Skip Kimura は Covelo で実習した後、Marin 郡 Bolinas 市にある保養研修施設「Commonweal」の菜園づくりに関わり、造園家として独立している。Green Gulch がチャドウィックを記念した庭園を造った際にはそのデザインにあたった。

5.4 New Market での実習生

ヴァージニアの New Market での菜園プロジェクトの実習生であった Craig Siska はその後もバイオ・ダイナミックとフレンチ・インテンシブ農法のコンサルタントとして普及教育にあたっている。

27) 「Live Power Community Farm」<http://www.livepower.org/> (2019年7月26日確認)

28) Alan York はこの映画の撮影中の2014年2月にガンのため死去。

29) 「Our Story: Frey Vineyards」<http://www.freywine.com/About-Us/Our-Story>

30) 「About the farm: Blue Heron Farms」<http://blueheron.farm/about-the-farm/>

5.5 Green Gulch 関係者

サンフランシスコ禅センターの Green Gulch Farm では Wendy Johnson が1975年の着任以来、専従の庭師として菜園づくりを主導した。1979年にチャドウィックが終末期を過ごすため Green Gulch に戻ってから亡くなるまでの5ヶ月間、直接指導を受けるとともに10回以上にわたる病床からのレクチャー、そしてお別れの会を開催し、元実習生や関係者が各地から集まっている。チャドウィックは Green Gulch で禅修行を行うことはなく、また修行者の日常の座禅ルーティンについて不満を持っていたが、Johnson は彼女自身が禅修行者であったことから、その後、禅とガーデニングを次第に統合させていく。現在はオーガニックガーデニングと禅の両方の指導者として活動するとともに、学校菜園教育である「Edible Schoolyard Project」のメンターとしても指導・助言にあたっている。

この「Edible Schoolyard Project」の創始者は Berkeley 市にあるオーガニック・レストラン「Chez Panisse」のオーナーであり、カリフォルニア料理（California Cuisine）を確立したといわれている Alice Waters である。Alice は Richard Baker 師の紹介でチャドウィックの晩年のレクチャーに参加した。

Deborah Madison は UC Santa Cruz 在学中に学生菜園プロジェクトのチャドウィックに出会う。卒業後 Green Gulch で禅修行を行い、その後 Chez Panisse で Alice Waters のもとでシェフとして働いた。サンフランシスコ禅センターは1979年、サンフランシスコの Fort Mason Center に Greens Restaurant を開業するが、Deborah Madison はその初代シェフを務めた。Green Gulch からの新鮮なオーガニック野菜による Madison による美しいベジタリアン料理の評価は高く、1987年には「The Greens Cookbook」を出版し、その後も多数の図書を執筆するなどしてオーガニックやベジタリアン料理の普及に努めている。

日本人画家の小田まゆみは禅修行のため1970年代から Green Gulch に滞在していた。晩年のチャドウィックにも会い、Wendy Johnson とともに菜園づくりにも携わりながら、ここで20年以上にわたって創作活動を行った。日米での反核運動にも注力し、女神や、大地から力強く生える野菜や果物を描く彼女の絵は、Green Gulch や Greens Restaurant のダイニングルームにも掲げられるほか、オーガニック運動のシンボルとしても各所で用いられている。小田はその後2000年にハワイ島に移住し、オーガニック農園「Ginger Hill Farm」を設立している。

チャドウィックの没後は Richard Baker 師の妻 Virginia Baker と Wendy Johnson の尽力により関係者を結ぶニュースレターが発行され、Chanwick Society や元実習生たちのギルドも構想された³¹⁾。チャドウィックの2度の Green Gulch 滞在は短いものであったが、以上のようにより深い影響を与えている。Richard Baker 師の経営者としての才覚もあってサンフランシ

31) Lee, 2014, p. 169

スコ禅センターはオーガニック運動の強力な牽引役となっており、その果たした役割は大きい。

5.6 UC Santa Cruz 農場のその後

さて、チャドウィックが去った後の UC Santa Cruz でも学生菜園プロジェクトが継続し、拡張、発展していく。実習生たちはしだいに「Garden：菜園」から、さらに規模の大きな「Farm：農場」への発展を志向しており、大学当局も学生菜園プロジェクトの成功と対外的な期待をうけて、1971年、広い用地としてキャンパスの下部、Cowell 牧場の牧草地であった17エーカーの土地を用意し、新しい UC Santa Cruz Farm とした。ここでチャドウィックのもとで実習生であった Steve Kaffka の指導により実習生プログラムを再開したのである。その後、果樹園や研究用圃場、温室や研究室などを次々と建設、拡張し、現在は30エーカーの面積になっている。1980年には生態学者である Stephen Gliessman が教授として着任したことで、農場は「Agroecology（農業生態学）」研究と教育普及の舞台として活用されることとなる。1993年には「Center for Agroecology & Sustainable Food Systems（アグロエコロジーと持続可能な食料システムのためのセンター）」と名付けられ、持続可能な農業の環境的側面と社会的側面の両方にフォーカスする教育・研究活動を行うようになっていく。世界的にも重要かつ先進的な研究拠点となっているとともに、50年以上にもわたって継続されてきた「Apprenticeship Program」とよばれる実習生制度からはこれまで1500名もの修了者を全米だけではなく世界中に送り出し続けている³²⁾。

また大学農場の敷地内には子どもや教師に向けた菜園教育（Garden Education）を実践する NPO「LifeLab」が活動しており、近隣の小学校～高校による現場学習の利用や、サマーキャンプ、そして教員向けの研修会や交流、情報交換の機会など盛んに活動を行っている³³⁾。またこの団体から派生して、10代の若者たちの食環境改善とエンパワメントのための NPO「Food What?!」が生まれるなど、持続可能な農と食、そして社会的公正を目指す取り組みが絶え間なく行われている。

6. まとめ：アラン・チャドウィックによるオーガニック運動への貢献

ここまで、チャドウィックの来歴について、そして彼が各地の菜園プロジェクトで用いた農法と指導手法の背景や特徴について述べ、また彼のもとで学んだ実習生たちや関係者のそ

32) 「Apprenticeship Training: CASFS」<https://casfs.ucsc.edu/apprenticeship/>

33) 前述した Alice Waters が Berkeley で創設した「Edible Schoolyard Project」とともに、全米での学校菜園教育における重要な牽引役となっている。

の後の動きについて明らかにしてきた。現在のカリフォルニアにおけるオーガニック運動の隆盛に着目し、その源流を辿ってみるとあらゆるところにアラン・チャドウィックの名前が出てくる。チャドウィックから学んだ人々、交流のあった人々は現在、カリフォルニアで展開されているオーガニック農業、そしてその生産者直販である CSA やファーマーズ・マーケットにつながり、オーガニック認証制度の確立、そしてカリフォルニアの特産品として発展してきたワインのオーガニックへの転換などにも寄与してきた。また菜園から生まれた新鮮な収穫物をいち早くキッチンに運び、素材そのものの味を活かしてシンプルに美しくいただくこと、食卓に花を飾り、家族や仲間たちと食事を楽しむスタイルは、カリフォルニア料理 (California Cuisine) やニュー・アメリカン料理としてのスタイルを確立し、レストラン業界にも変革をもたらしたことで、従来のアメリカの食のイメージを変えてきている。また子どもたちの食環境の改善から始まり、学校での教育の中心に菜園とキッチンを置こうという菜園教育運動、そして地域住民が協働して運営管理するコミュニティ・ガーデンや、ホームレスなど社会的弱者支援のための菜園活動にも、チャドウィックの遺伝子が確実に受け継がれている。

チャドウィックがアメリカでの菜園プロジェクトに関わった1960年代後半から70年代という時代の社会背景として、①ベトナム戦争が泥沼化し、若者を中心とした反戦運動、平和運動が高まっていた³⁴⁾。② Rachel Carson によって1962年に出版された「沈黙の春 (Silent Spring)」によって化学農薬の問題点が公にされ、その後の環境保護を支持する動きへとつながっていった。③アフリカ系アメリカ人による公民権運動の高まりから、人権意識の向上や社会的公正の視点が定着していった。④産業社会化・都市化が進展する一方で、一部の若者たちは「土地回帰・田舎回帰 (Back to the land)」の志向に強く引きつけられていた。⑤ NASA によるアポロ計画 (1961-1972) を通じ、人類は大気圏外、さらには月面から地球の姿をとらえるというまったく新しい視点を得て、宇宙からの視点と土を耕す行為との結節点が現れたともいえる。

このように1960年代から70年代にかけてのアメリカは以上のような社会背景からヒッピー、カウンターカルチャー、エコフェミニズムといった動きが活発化し、伝統的な価値観が大きく揺るぎ、混沌のなかから新たな価値観やライフスタイルが生まれる時代であった。このような背景のもと、各地の菜園プロジェクトでチャドウィックと若者たちが出会ったのである。ともに土を耕して汗を流し、美しい野菜、果樹、花々に満たされ、鳥たちやチョウ、ハチが舞う、小さなユートピアを創り出すという取り組みであった。しかしこのユートピアは現実のものとして、しっかりと実際の社会に根付いていく要素をもっていたといえる。それは実

34) 若者に対する徴兵制度も1973年1月まで継続していた。一部の元実習生は兵役を拒否したと語っている。

習生制度を通じて、農薬や化学肥料を使わない、質の高いオーガニック農産物を安定して産出できる手法を多くの若者たちが修得したことで、産業社会化・都市化に抗おうとする若者の土地回帰・田舎回帰の志向にあわせて、チャドウィックは自分の手で具体的に生活していけるという見本となったのである³⁵⁾。すなわち、チャドウィックによる菜園プロジェクトは、ヨーロッパの伝統文化と園芸技術を体現した人物とカウンターカルチャー世代の若者との遭遇から、その後のオーガニック運動の担い手たちを生み出していく「ビッグバン」であったといえる。当時のアメリカ社会とその状況下で「もがいていた」若者たちに向けて、ヨーロッパからやってきたシェークスピア役者がスコップ1本で果たした役割はたいへんユニークで、かつ大きいものであった。

謝 辞

本論文の執筆にあたっては、Jim Nelson さん、Nancy Lingemann さん、Wendy Johnson さん、小田まゆみさんにはチャドウィックの関係地の訪問受け入れとヒアリングに多大な協力をいただきました。ご厚意にたいへん感謝申し上げます。またこの研究は広島修道大学の派遣研究制度を用いて UC Santa Cruz への一年間の滞在により可能となりました。とりわけ UC Santa Cruz の村本穰司さん、藤田栄さん、Chris Benner さんにはたいへんお世話になりました。両大学の関係者の皆様にも重ねて感謝申し上げます。

【参 考 文 献】

- Chadwick, Alan (2007) “*Performance in the Garden*” Logosophia
Chadwick, Alan (2013) “*Reverence, Obedience and the Invisible in the Garden*” Logosophia
Howard, Robert Skjei, Eric (1986) “*What makes the Crops Rejoice: An Introduction to Gardening*” Little Brown and Company
Jeavons, John (2017) “*How to GROW MORE VEGETABLES*” NINES EDITION, TEN SPEED PRESS
Johnson, Wendy (2008) “*Gardening at the Dragon’s Gate*” Bantam Dell
小杉英了 (2000) 『シュタイナー入門』筑摩書房
Lee, Paul A. (2013) “*There is a Garden in the Mind: Alan Chadwick and the Origins of the Organic Movement in California*” North Atlantic Books
Madison, Deborah (1987) “*THE GREENS COOK BOOK*” BANTAM BOOKS
McKanan, Dan (2018) “*ECO-ALCHEMY Anthroposophy and the History and Future of Environmentalism*” University of California Press
Schneider, David (1993) “*Street Zen: The Life and work of Issan Dorsey*” Shambhala Publications
University of California Santa Cruz (2010) “*Cultivating a Movement: An Oral History Series on Sustainable Agriculture and Organic Farming on California’s Central Coast*”
University of California Santa Cruz (2002) “*The Early History of UC Santa Cruz’s Farm and Garden*”

35) チャドウィックは祖国や家族とも遠く離れ、なんの援助もうけず自立して生活していた。